

# 新 家の歴史

題字イラストレーション 市川興一/いっしょとむ

684

## 所功(歴史学者)

### 悪さをすると仏壇の前で

### 「お父ちゃんが見てる」と叱られたものです。



昭和16(1941)年、岐阜県生まれ。名古屋大学卒業、法政大学助教授、文部省教科書調査官、京都産業大学名譽教授、モロロジー研究所客員教授。「元号」「皇位継承」(共著)など著書多数。

僕は歴史家として人間に心があり、誰がどんな家で生まれ育ち、どこへ移り住んだか、とても興味があります。その人の背景を、深く知る手がかりになるからです。なかなか知ることでできない来歴を当人が語るこの連載は、毎週楽しみに読んでいました。

一 平成から令和への御代替

何をしゃべってるとか!」と怒鳴り込んでくれました。マイクのスイッチが入ったままなのに誰も気づかず、学校中に聞こえていたんです(笑)。一番力を入れたのは、日本史担当の稲川誠一先生の指導でつくった歴史同好会です。日曜日には自転車まで旧国宝の大山城や、瀬戸市(愛知県)にある尾張藩初代・徳川義直の菩提寺・定光寺など、かなり遠方まで史跡めぐりに行きました。

昭和三十五年、名古屋大学に入学。一・二年次の教養部を経て、三年次から文学部国史学科へ。卒業後は名古屋大学大学院の文学研究科修士課程へ進み、官廷儀式を専門に研究する。

高校すら難しい経済状態でしたから、大学は無理だと思っていました。ところが母から「学費の安い国立で、家から通えるなら」と背中を押さ

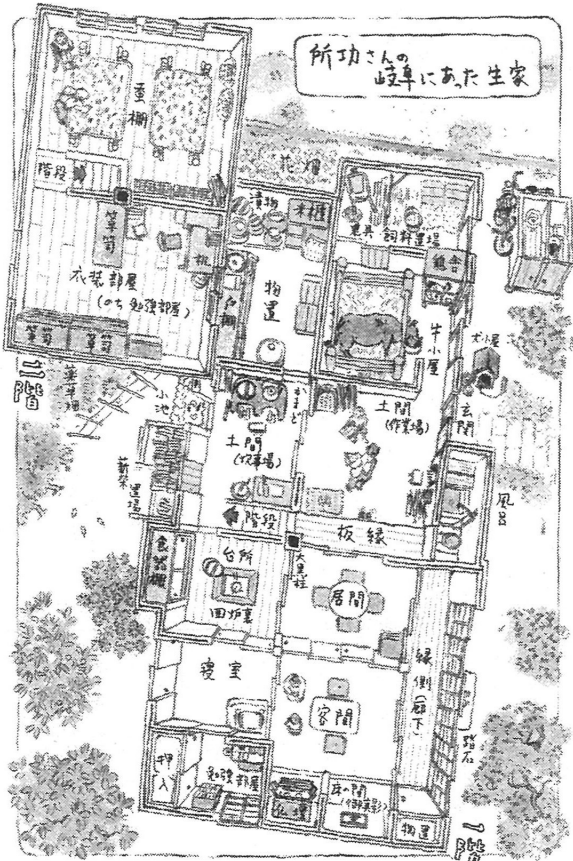
わりに伴う儀式や新元号の解説で、テレビなどに引張りだこだった所功さん。岐阜県の西北部に位置する揖斐郡の小島村野中(現在は揖斐川町小島野中)という山村に生まれたのは、昭和十六(一九四一)年十二月十二日。

当時「大東亜戦争」と称さ

れて、名大を受けたのです。片道三時間近くかけて通学しながら、四年間アルバイトに励みました。就職したときの初任給より、学生時代のアルバイト代のほうが多かったくらいです。月曜から金曜までは家庭教師を三軒くらい掛け持ちして、小学生から予備校生まで十数人を教えました。土日や春休み・夏休みには、近畿日本ツーリストの添乗員をやりました。中学や高校の修学旅行は秋が多いせいで、授業はかなりさぼりましたが、各地で歴史の実地見学もできました。

最も待遇のよかったアルバイトは、一宮市(愛知県)にある山下病院の服部敏良院長のお手伝い。院長は戦時中から医学史の研究に取り組み、すでに奈良時代・平安時代の本を出版されていました。僕の初仕事は、藤原定家の日記「明月記」を読み、医事関係の記事を探して抜き出すことでした。

そのノートを毎週持参すると、内科医の服部先生は、定家は脚気を患っていたと即座に診断を下されるのです。そんなやりとりを続けて鎌倉時



れた開戦直後の気分が、「功」という命名に表れています。父の弟が木工で、初めて自ら棟梁となって建てたのが、僕の生家です。父と二人で山から木を一本一本伐り出して、乾燥させ、昭和十一年に完成するまで、十年以上かかったそうです。田舎の小作農家としては立派な、木造瓦葺きの二階建てでした。

代から室町、江戸時代までの医学史を仕上げられました。しかも僕が勧めたら、『御堂関白記』を分析して藤原道長が糖尿病だったことも突き止めて、その新説が今では通説になっています。このお手伝いを通して、史料は関心の持ち方によって多様な読み方ができることを学びました。学部を卒業したら、郷里で高校の教師になるつもりでした。そんな僕に大学院進学を

一階には部屋が四つと、農作業用の土間と炊事用の土間、物置き、玄關脇に農耕用の牛「朝子」の小屋と鶏舎、農具や飼料の置き場がありました。二階は台風被害を避けるために天井が低く、衣装部屋と養蚕の棚が並んでいました。

僕の部屋は西北の隅で二層しかないのですが、窓から小学校も小島山も見えるのが好きでした。中学校に入ると、二階の衣装部屋を勉強部屋に

### 高校教師に影響を受けて歴史の世界に。大学の教員となり伊勢に引越す

幼い記憶にあるのは、毎年五月の三輪神社の揖斐祭です。その露店で、絵本や漫画を買ってもらうのが楽しみでした。特に気に入ったのは『源平盛衰記』の子供向けの物語で、いまでも挿絵を覚えて

村立小島小学校で児童会長、小島中学校で生徒会長を務めた。

昭和三十三年に入学した岐阜県立大垣北高校で、ユニークな歴史の先生と出会ったことが、人生を方向づける。

一に採用される。

田中先生は、皇學館大学の有志の学生を特別に指導するために「伊勢青々塾」という私塾を作られ、少し年長の私に世話役を委ねました。量の部屋三つに、多いときは十数人の男子学生と、自炊し激論しながらの共同生活は楽しかったですね。

大学院で学びながら、田中教授の私塾で鍛えられました。昭和四十一年、皇學館大学文学部国史学科の助手

直してもらいました。父は昭和十七年七月に赤紙で召集され、一年後に南方で戦死します。生後七か月で別れた僕には、もちろん記憶がありません。二十六歳で寡婦となった母が、数反歩の畑を耕したり内職しながら、女手一つで育て上げてくれました。悪さをすると仏壇の前で座らされて「お父ちゃんが見てるから、恥ずかしいことをするなよ」と厳しく叱られたものです。

中学校では音楽部に入りました。バイオリンにあこがれたのですが、まったく才能なしと見抜いた顧問の先生から、引き受け手のないチェロを勧められました。校外で演奏会があるときなんか、持ち運びが大変でしたね。

高校では英語が話せるようになりたくてESSに入りましたが、これも駄目。好きなレコードが聴きたくて、放送部に入りました。ある日の昼休み、校内放送でレコードを流しながら、同級の部員と先生の噂話をしていたら、いきなり校長先生が「君たち!

やがて助手に採用され、内宮に近い伊勢市宇治の古いお

宅の二階に下宿しました。すると赤福餅の本店から「赤福の二百六十年史を書いて欲しい」という仕事を頼まれました。しかし苦勞して書き上げた初稿は、読物として全然面白くないといわれました。そこでプロのライター協力を得て、戦中も戦後も苦勞しながら店を切り盛りした濱田まっすさんというおばあさんが家の歴史を語る、という読みやすい形にリライトしました。「餅は餅屋」とはこのことかと思いましたが(笑)。

『赤福のこと』と題するこの本をきっかけに、フジテレビが十朱幸代さん主演で『赤福のれん』という連続ドラマを放送して、大好評を博しました。

伊勢に引っ越してからも、土日はなるべく実家へ帰っていました。母が「こんな家では、嫁が来てくれない」と言い出して、大改装をしてくれただのは、昭和四十二年です。



結婚後は、平日は伊勢、週末は岐阜を夫婦で行き来することになりました。

昭和四十四年四月四日、京都女子大学の史学科を卒業して研究室に勤めていた京子夫人と結婚。同じ年に皇學館大学文学部の専任講師となり、三年後に助教授

彼女とは京都の研究発表会

京都と岐阜で夫婦の二重生活。「平成の改元」がメディア出演の契機に



新居は、外官に近い岡本町の蓬萊荘というアパートです。木造の長屋で四畳半しかなく、冷蔵庫と洗濯機を置いて、冷庫庫と洗濯機を置いて、の狭い部屋でした。

助教授になった昭和四十七年、大世古町に一軒家を借りました。伊勢に多い「妻入り」という造りでした。建物の長辺側出入口がある「平入」の伊勢神宮に遠慮して、玄関が建物の側面についているのです。細長い家ですが、奥に坪庭もあり、学生がよく遊びにきました。

父の享年と同じ三十歳になったこの年、ソロン諸島二

で初めて会い、半年後にスピード結婚しました。

式場が空いていたので四月四日に決めたのですが、お袋から叱られました。「四が四つも並ぶなんて、縁起でもない」と言うわけです。ところが披露宴で、主賓の久保田取文学部長が「誠によい日に結婚されました。始終よしよくですな」とスピーチしてくださったので、救われました(笑)。

ユージョージア島の戦跡を訪ねました。

到着当日、父の所属していた陸軍二九連隊十二中隊が玉砕したジャングルで、同行してくれた現地の人々が日本兵の飯盒を拾い上げたんです。その内蓋をこすったところ、「所」という文字が刻まれていました。

翌朝、その近くで太い足の骨を拾いました。その日は七月二十七日。父の命日でした。

これは父の導きがちがいない、と思います。世の中には、合理的な考えでは理解できないこともあるのです。

で、徐々に回復しています。

小田原へ越したあとも、岐阜の実家はそのまま残しておくつもりでした。母はいつも、「お父ちゃんが建てたこの家は、絶対に壊したらいかん。万が一自分の家がどっか来たとき、生きの死がどこかわからんと困るから」と言っていました。

だから大改装の際にも、外観はまったく変えませんでした。僕が伊勢や朝霞、京都に住んでも郷里から本籍を移さなかつたのは、母の思いを汲んだためです。

ところが、家は人が住まなくなると、急激に傷みます。ご近所に迷惑をかけてもいけないので、想い出の多い実家を一昨年、断腸の思いで取り壊しました。

最近『日本学ひろば 88話』(コミニケ出版)という随想集を纏めましたが、今日はそれよりも私的なことをあれこれお話ししました。自分がどこに住み、どうやって生きてきたか、ありありと思いつきました。数えて八十年近い間の住居と、その時々に出会えた人々にあらためて感謝したいと思います。

(取材・構成 石井謙一郎)

野菜や富有柿でした。

昭和五十六(一九八二)年、京都産業大学教養部の教授に就任。三年後に法学部教授に。さらに日本文化研究所の所長などを歴任し、平成二十四年に名誉教授となる。京都での住まいは、市内にあった京子夫人の実家。

まだ東京にいた昭和五十五年の正月、岐阜のお袋が大けがをして、手術の際の輸血でC型肝炎に感染し、長期入院を余儀なくされました。すると家内が「おばあちゃんを放っておけない」と言っていて、ちょうど小学校に上がる娘と一緒に、僕の実家へ引っ越してくれました。

それから單身赴任となった僕は、公務の合間に都内の資料館や図書館で宮廷儀式の古写本などを調べ尽くすことに力を入れすぎ、毎朝ラーメンばかり食べていました。それで身体を壊したのを心配された田中先生が、京産大への道をつけてくださったのです。家内の実家は、龍安寺と妙心寺に近い、右京区の小さな平屋です。部屋は四つあって、家内の母と伯父が住んで

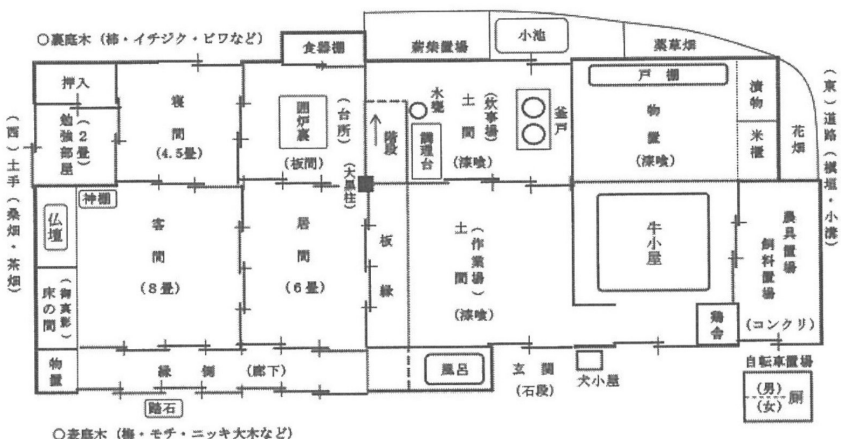
いました。僕は、大学の授業がある火曜から金曜までこの家で暮らし、それ以外の日は岐阜の実家へ帰ることにしていたんです。

家内は僕の母と暮らしながら、岐阜にある聖徳学園短大で国文学を教えていました。娘が平成十年に結婚したあとは、九年後に九十歳で亡くなるまで、家内が母の面倒をよく見てくれました。

京都では、平成四年に義母、六年後に伯父が亡くなるまで、僕が面倒をみました。その後も平成二十四年に京産大を退職するまで、僕はこの家で一人暮らし。今も上洛中の宿所としています。

昭和から平成への改元(一九八九年)、昭和天皇の御大喪、新天皇の即位礼や大嘗祭、皇太子の御成婚など、皇室に大きな行事が続くと、所さんは数多くのテレビ番組に出演して、解説を務めた。現在は、公益財団法人モラロジー研究所(千葉県柏市)の道徳科学研究所センターで、皇室史の研究を続けている。

僕は岐阜の郷里と共に、伊



郷里の生家(昭和40年に改装する以前)の一階平面図(二階は衣裝部屋・養蚕位置)。岩田享氏入力

『日本学ひろば88話』(コミニケ出版、令和2年) 235頁より